

# KSK 川崎市障害者社会参加 推進センター通信

編集人 川崎市障害者社会参加推進センター  
所長 なかごめ よしまさ 中込 義昌  
編集責任者 広報・啓発委員会  
委員長 いとう みほる 伊藤 實  
〒210-0834 川崎区大島 1-8-6  
川崎市南部身体障害者福祉会館内  
電話 044-246-6941  
FAX 044-246-6943  
E mail zksk@nifty.com  
http://kawashinkyo.org

## 令和 2 年度障害者作品展 開催



令和 2 年度川崎市障害者作品展を今年も 12 月 16 日(水)から 20 日(日)の 5 日間にわたり、アートガーデンかわさき(第 1 展示室)にて無事開催することができました。

この作品展は、創作意欲や創作技術の向上、障害者自らの生きがいに繋げることで、広く社会の障害者に対する理解を深めることを目的に、当社会参加推進センターが川崎市と共に、(公財)川崎市文化財団の協力を得て開催している展覧会で、アートガーデンかわさきに会場を移してから 5 回目の開催となります。

開催にあたっては新型コロナ対策のため色々な試みに取り組み、お陰様で感染も発生せず、無事に終わることができたのは感染防止の取り組みにご協力をいただいた来場者や出展者の皆様のお陰ですので、改めて感謝申し上げます。

さて、今年度は絵画 35 点・写真 11 点・書 10 点・文芸 2 点・手工芸 5 点、計 63 点の展

示を行いました。コロナ禍の影響の中、これだけのご出展をいただいたのも、関係者のご協力の賜物だと思っています。また観覧者は 256 名と例年並みの人出で、十分だったと思っております。

一つ残念だったのは、毎年行っているワークショップ(創作体験)を中止せざるを得なかったことです。障害者を含む体験者がインストラクターからレクチャーを受けながら創作を体験する性格上、どうしても効果的な 3 密対策を取ることができず、中止とさせていただきます。創作体験を楽しみにしていただいた方には、申し訳なく思っています。

そのような状況下ではありましたが、観覧にきていただいた来場者の目線で言えば、作品も間隔を取って展示されている中、会場内をエリアで区切りエリア毎に定員を設けたためゆったりと、ワークショップもなく受付もほぼセルフ式なので静かに、落ち着いて作品一点ずつゆっくり鑑賞することができたのかも知れないなと思っており、本来はそうであるべきなのに、と気付かされた面もございました。

来場者にご記入いただいたアンケートを拝見しますと、「障害をもたれた方でも一生懸命に自分を表現する姿勢が素敵だった」、「どの作品も個性があってよかった」、「自分にはない視点から見えている作品が多くあり良かった」、などの肯定的な感想や今後の展示会の

発展を願うご意見などが多く寄せられ、また「コロナ禍の中でも作者のみなさんが作品発表できていることが、ご本人にもご家族にも勇気と力になると感じられた」との意見もあり、今回の作品展の実施、その方法についても間違っていなかったなと心強くされました。次回（令和 3 年 12 月）の開催時期には我々みんながワクチン接種を終え、コロナ禍が収束していることを願いつつ、この作品展がより発展して開催することができるよう励みますので、皆様の一層のご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、作品展実行委員会の皆様には今回難しい舵取りをしていただいたな、と思っております、誌面を借りて改めて感謝申し上げます。



#### 【新型コロナ対策の取り組み】

今回の作品展では次の対策に取り組みました。

**受付**…検温の実施、手指消毒、感染に備えた連絡先の記入、プログラムのセルフ式配布、受付スタッフ人員の最小化、人が触れる箇所の定期的な消毒、等

**会場内**…作品間に一定の間隔を設けた展示、会場内を複数のエリアに区切りエリア毎に定員を設ける、会場内を一方通行に、会話自粛のお願い、会場全体での定員管理、等

**その他**…アンケート記入場所の定員管理、人が触れる箇所の定期的な消毒、ワークショップの中止、等

（事務局）

#### 出展者の思い「一冊の図鑑から」

##### 【絵を描くようになったきっかけ】

僕が絵を本格的に描き始めたのは、小学三年生の頃です。僕は小さい頃から生き物に興味があり、気になった動物は図鑑で調べていました。誕生日に母が、雪景色の中で力強く飛びあがるアムールトラの表紙の図鑑を買ってくれました。トラの筋肉の付き方や風格、独特の柄にどンドン心惹かれていく自分がいました。眺めているだけでは物足りなくなった僕は、書いて構造を理解しようと思いました。今思うと、僕が絵を描くようになるきっかけは、ここにありました。

##### 【美術部入部～作品展出展】

小学生のときサッカーをやっていた僕は、中学生になって運動部と美術部の二択で迷います。仮入部で美術部を体験し、先輩方のやさしさ、色塗りの方法に興味をもつ自分がいて、三年間続けていけるという想像ができました。一年生の終わりに障害者作品展のことを知り、自分の作品を出展し多くの人に見てもらいたいと思うようになりました。しかし、やるならまだやったことのない方法で作品を作ろうと思い「砂絵」に挑戦することにしました。

そこから制作を始め出展した作品が、砂絵でカワセミを描いた「しぶき」（前回の作品展への出展作品）です。僕はこの時期に鳥をよく模写をしていたので、この作品で「生命を感じさせる」生き生きとした動物を描き、自分の想いを伝えられたらと考えました。カワセミという鳥を選んだ理由は、深い緑と赤味が強く、オレンジとのコントラストがきれいだったからです。砂で表現するには、絵具のように色を混ぜることができません。色の組み合わせが重要だと感じ、沢山の色の中から際立つ、色鮮やかな鳥にしました。実際に川で見たことがあります、警戒心が強く、澄んだ川でしか生息できない繊細な生き物です。

そのカワセミに、自分の想いを乗せて作品づくりを行うことにしました。

カワセミを引き立たせるために水の波紋にこだわり、勢いよく飛び立とうとする瞬間を描きました。また、色合いにもこだわり、陰となる場所に色を濃くするなどして工夫し、明るいとこがより引き立つようにしました。完成まで、一年をかけました。今回の作品展募集のリーフレットの表紙に選んでもらい、本当に嬉しかったです。家族みんなで喜びました。自分が作った作品で誰かが喜んでくれる、そのことを感じることができました。

### 【2020年の出展

～すべての人に想いが伝わるように～】



今年度は、二つの作品を出展しました。一つ目の作品は「自画像」です。自分の想いを表情と背景で表現しました。描くきっかけになったのは、ネットの記事やテレビなどで森林伐採、環境汚染などで生き物や植物の居場所が消えつつあるという状況を重く受け止めて、少しでも改善の道へと向かうようにしていきたいという想いを込めました。この作品は、クレヨンと油で描きました。赤と緑が自分と混ざり合ってく作品です。

表情は、真剣に何かを伝えようとしています。背景は、右側にいくほど赤を強くし、植物は少し黒ずんで生気がないように見えるようにしました。これは、今の世界中で起こっている環境問題を表しています。対象に右は明るく輝き、植物は肉厚でのびのび生えています。これは僕が思う自然の理想を描きまし

た。人間がこれ以上、自然を汚さないように表情と姿勢、そして目の色で伝えました。工夫した点は、青系の色を一切使わずに仕上げたことです。これは想いを色で表現したかったので必要色のみを作品にバランス良くのせました。

二つ目の作品は、愛犬「小春」の絵です。こだわった部分は、HBの鉛筆のみで仕上げたことです。薄い色の中にある優しさを表現することを目指しました。HBの鉛筆だからこそ出せる柔らかい毛並みや、表情になったと思っています。タイトルは愛犬の名前からですが、「春が早く来るように」という思いを込めてつけました。また、春は生き物たちが目覚める季節です。これから生命が躍動し始めるという希望を感じてもらいたくて、描きました。小春は、我が家の家族の一員として、穏やかに暮らしています。

### 【作品と向き合うとき】

僕が作品を制作する際、「生き物たちが健康でいられる世界」を理想として、想いを込めています。自然や生き物に関する作品がほとんどです。これからもこの想いを伝えることはないと思います。

今はパソコンを使って、デジタルで描くことを練習しています。自分らしい絵のタッチがデジタルでも出せるようにと頑張っています。高校入学後も丁寧に作品づくりを続け、作品展への出展や、学校に貢献できるような作品を作りたいと思っています。

ひとつずつの作品を制作していく中で、いつか自分の個展を開くのが目標です。「すべての生き物が、生き生きと躍動できる希望を作品にする」この想いを形にして、多くの方に作品を見てもらえるように頑張りたいと思います。将来、そのときがきたら、お世話になったみんなに来てもらいたいです。

(永井 太陽)

## 助け合いアプリ「May ii」

段差に困ったとき、目的地への行き方が分からないときなど、面と向かっては声をかけづらいときに、「移動に困りごとを抱える人」と「サポートが可能な人」とをつなぐマッチングアプリ「May ii」を使って気軽にサポートを依頼してみませんか。

アプリは「App Store」、「Google Play」からダウンロードできます。

費用：無料 利用時間：8時から21時まで

昨年9月に川崎市は「かわさきパラムーブメント」の一環として、「May ii」（メイアイ）を管理し運営する大日本印刷（株）と川崎市域における使用とその認知度向上・利用促進のため確認書を締結し、現在次の市内主要駅周辺エリアで「May ii」の運用を試行的に実施しています（他に東京23区や札幌・福岡でもサービス提供中）。

アプリ詳細は「May ii」HP [<https://mayii.jp/>]

段差があつて前に進めない、ちょっと買い物を手伝ってほしい、そんな時に



← App Store

Google Play →



[川崎]エリア



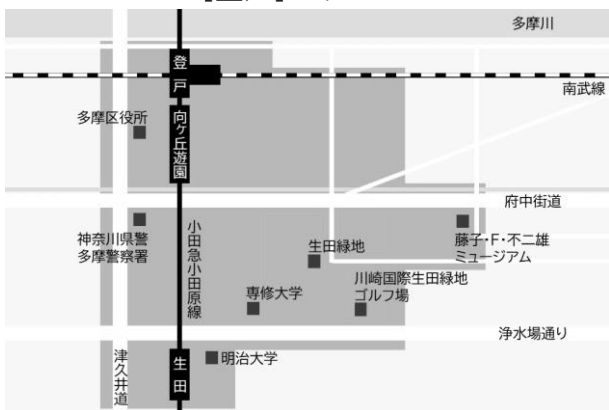
[武蔵小杉]エリア



[武蔵溝ノ口]エリア



[登戸]エリア



[新百合ヶ丘]エリア





## 川崎市内の作業所紹介 「地域活動支援センターなのはな」

「地域活動支援センターなのはな」は、社会福祉法人川崎聖風福祉会が運営する通所施設で、平成 21 年 10 月に川崎区大島にて開所し地域の皆さまに支えられながら 12 年目を迎えております。

現在、登録されているご利用者は 37 名。利用する曜日や回数についてはご家族やスタッフと相談の上、ご自身で決めている方がほとんどです。

また、「地域活動支援センター」では珍しく、送迎サービスも行っていますので、通所に不安がある方や、家を出ることにもう一歩踏み出せない方の背中を押し、利用させていただくお手伝いになっています。

日中活動では創作活動として、主に毛糸を使った編み物やマスコット人形などを作製しており、自信作が出来た際には「川崎市障害者作品展」などへ出品も行っています。



通常は、地域イベントへの参加や外出・買い物活動、就労へ向けてのパソコン操作（ワード・エクセル）や委託業務として賃金が発生する情報広告紙の配布などを行っていますが、昨年から続く新型コロナウイルス感染症の影響で、すべてのイベントや外出活動は中止、ポスティング作業は委託元の企業の諸事情により契約の打ち切りとなりました。

今まで経験した事のないような日々を過ごしてきましたが、これも自分たちには良い経験だと思い、終息した暁には「イベント参加や外出活動を思い切り楽しもう！」と皆で計画しています。

障害を持つご利用者の皆さんと一緒にいると、一人ひとりの個性豊かで純粋な面が見えます。しかし、その様な一面が近年では社会的偏見や差別につながり、結果として「ひきこもり」や「家出」「ホームレス」など自分一人ではどうすることも出来ない状況に陥る要因となることも少なくありません。

「なのはな」では、ご利用者の皆さんが地域に溶け込み、自立した生活が出来るようなお手伝いをしていきたいと思っています。

スタッフは「障害者が地域で安心して暮らせる社会を実現する」という理念のもと、当法人が基本理念の一番目に掲げる「福祉サービスを利用する個人の尊厳の保持を基本に、ご利用者が心身ともに健やかに日々を過ごすことができるよう適切なサービス提供に努める」という意識を持ち、ご利用者に「安心して、ありのままいられる場所」、「自分がそこにいていい場所」と思っただけのよう努めています。



### 【お問合せ先】

地域活動支援センター なのはな  
〒210-0834 川崎市川崎区大島 4-7-12 仲谷ビル 1F  
TEL・FAX 022-222-2852

社会福祉法人川崎聖風福祉会ホームページ

[<https://kawasakiseifu.or.jp/>]

見学・体験のご相談、お待ちしております。



## 令和 2 年度 コロナ禍での親の会活動

令和 2 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大から、4 月 7 日に「緊急事態宣言」が発令されたことにより、例年とは違った“会の活動～自粛しながら活動する～”を試行錯誤しながら続けています。

定例の会議であったり、様々な会議の中止、研修会・行事活動等の中止という対応を取りながら“活動”を行ってきています。

会議などは、「緊急事態宣言」解除後、その後の感染状況をみながら徐々にその活動を再開し、夏休み以降からは、例年通りのペースでの活動を、また研修会・行事なども年度末に向けて開催の準備を進めているところです。

このように、私たちの生活すべてに関わってくる“コロナ禍”の中での活動への取り組みは、少なからずいくつかのことを教えてくれたように思います。今まで普通にできていた活動を、様々な手段を模索し行う中で、今ある技術を上手く使うことで、離れていても会議が出来たり、研修に参加することが出来たり、もちろんその技術を使うための技術の習得(ちょっと大げさ)は必要となりますが。何かの力を借りて、ことを行う事は、可能性の追求～『もし、こんな補助具があったら、一人一人の可能性をもっと広げられるのではないか』、こんなことを気づかせてくれたように思います。

また、それとは反対に、できないことへの“もどかしさ”を感じたり、“できないこと”自体への共感だったりへの気づきも教えてくれたように思います。少し話がそれてしまったかもしれませんが、今までの活動を“俯瞰”して見る機会になったのかもしれませんが。

そのような今年の中での活動の中で、会の広報紙(会報)の紙面を利用して、会員の皆様から、「新型コロナウイルス自粛生活を振り返っ

て」という寄稿文をいただき、何回かに亘って掲載をしました。

それらを読ませていただくと、“あー、そうそう”と共感したりすることあれば、“へー、そうなんだ”と発見したりすることがありました。

私は、この特集を読んでみて、トルストイの“アンナ・カレーニナ”の冒頭の文章(注)へと導かれていきました。実際には、アンナ・カレーニナを読んだことはないのですが、以前読んだ本の中で、引用されていたため思い出しました。この特集の中で、会員の皆さんのほんの一部分ではありますが、“日常”を知り、一人一人の“同じ”や“違い”に気づかされました。そして、きっと会員同士のこの“気づき”の共有が、会の活動の原動力になっているのかな、とも思いました。

(注)『アンナ・カレーニナ』冒頭の言葉  
「幸福な家庭はすべてよく似たものであるが、不幸な家庭は皆それぞれに不幸である」  
中村白葉：訳（1926 年）

(川崎市育成会手をむすぶ親の会事務局

藤巻 仁)

## 障害者雇用を考える ～精神障害者～

先日の新聞に障害者雇用が増えているという記事が載っていました。特に精神障害者の雇用は大きく伸びているとのこと。今でも将来の目標は？と聞くと多くの利用者さんは「就労」と答えます。障害者雇用が増えていることそれ自体は喜ばしいことだと思います。

しかし、現在の障害者福祉施策は、フルタイムで働ける健全者を目標に置き、それいかに近づけるか、にばかり目が向いているように思えます。とりわけ体調の変動が大きく安定して働き続けることが難しい精神障害者にとって特に不利益な制度改正が多いです。

例えば、平成 30 年度の報酬単価制度改正で、就労継続支援 B 型事業所では、時給による算定が認められていた目標工賃達成加算が廃止され、報酬単価は月平均工賃のみが評価されるものになりました。私が勤めていた就労 B 型は、利用者さんの作業能力が高く時給では川崎市内で上位 3 位以内には入っていましたが、平均工賃では神奈川県内全就労 B 型事業所の平均である 1 万 5 千円程度にしかならないため大幅な減額となってしまいました。また同じ改正によって、利用者と労働契約を結ぶ就労継続支援 A 型事業所の報酬単価は、1 日の平均労働時間が多い場合に評価されるものに改正されました。

その人の体調に合わせて毎日通所する人もいれば、週 1 日程度の通所ペースの方もいる、フルタイムで 1 日中働く人もいれば、半日のみ働く人もいる、平均すれば登録者全体の半分程度が毎日通所しているのが精神障害者を対象にする事業所の実態だと思います。

フルタイムで週 5 日働くことが価値であるような健全者社会の働き方に障害者を合わせるのではなく、その人のペースに合わせて無理なくできることをして体調を維持し、地域で安心して暮らせることの価値を社会に提示していくこと、これは精神障害だけに限らず障害者の働き方として大切なことではないでしょうか？うつ病で仕事を休業中の方が、障害者作業所のゆったりとした時間の流れの中で回復していった例も出てきています。

激的な障害者解放運動を行なった青い芝の会の故横塚晃一氏は、その著作『母よ殺すな！』の中で次のように書いています。

「我々障害者は、一束かつげなくても落ち葉を拾うだけ、あるいは田の水加減をみているだけでもよしとすべきであり、更にいうならば寝たっきりの重症者がオムツを替えてもらう時、腰をうかせようと一生懸命やること的那个人にとって即ち重労働としてみられるべきなのです。」

50 年近く前の文章ですが、今こそ読まれるべきものではないかと思います。

(川崎市精神障害者地域生活推進連合会

事務局次長 伊丹<sup>いたみ たかし</sup>高)

## 【連載】東京パラリンピック競技紹介

### ボッチャ

～高い戦略性、  
一発逆転もあり  
最後まで目が離せない～



赤・青のそれぞれ 6 球ずつのボールを投げたり転がしたりして、ジャックボール（目標球：白）にいかにか近づけるかを競う競技です。ルールはカーリングと似ているため「地上のカーリング」とも呼ばれますが、カーリングと同じく相手のボールを弾くだけでなく、目標球を弾いて移動させることもできるため、非常に戦略性が高く、常に一発逆転の可能性を秘めた競技です。

イタリア語で「ボール」を意味するボッチャは、重度の脳性マヒの方や同じく重度の四肢機能障害の方のために考案されたスポーツで、ニューヨーク 1984 大会からパラリンピックの競技に採用されています。種目としては団体戦（チーム戦、ペア戦）3 種目、個人戦 4 種目の合計 7 種目が実施されます。主に重度障害の方が競技するため、競技アシスタントのサポートを受けたり、ボールを手で投げることが難しい場合には足で蹴ったり、滑り台に似た勾配具（ランプ）を使用することが認められています。

またボールさえあれば小さな子供からお年寄りまで気軽にできる競技であり、広く一般に普及することも期待されます。

日程：2021 年 8 月 28 日（土）～9 月 4 日（土）

会場：有明体操競技場

※スケジュール等は今後変更される可能性があります。



### 令和 2 年度 脊髄損傷者研修

令和 2 年 11 月 29 日(日)川崎市国際交流センターにて、たかつ基幹相談支援センター障害者相談支援専門員・保健師:小島久美子氏を迎え「健康診断等の結果を正しく理解して…自分の身体の状態を改めて確認しよう！」と題してご講演をいただきました。参加者は持参した検診結果を基に、説明を聞きながら頷く様子が見受けられました。なによりも健診によって早期発見し大病をくい止める大切さを改めて理解することができました。後半の個別相談にも希望者は多く、日頃気になっていることを気軽に相談する事ができとても好評でした。



(全国脊髄損傷者連合会川崎協会  
北島 さとみ)

### 川難聴 コロナ禍の一年を振り返って

昨年 2 月頃に国内で新型コロナウイルス感染者が急増してから、川難聴では 3 月の「耳の日の集い」を中止し、4 月に政府の「緊急事態宣言」発令を受け 5 月の総会は書面総会にしました。毎月の定例会や勉強会などは、殆どの行事が中止になりました。しかし、秋頃から市聴覚障害者情報文化センターの研修室やエポックなかはら等の会議室が利用制限付きで使えるようになり、やっと読話や手話の勉強会で 3 密を避けて開催できるようになりましたが、年末になっても新型コロナウイルス感染者が増えるばかりで収束の見通しがたたないため、Zoom を

利用したオンラインでの会議や会員同士の交流を検討しました。

けれども難聴者が Zoom を利用するためには、参加者の音声会話が聞き取れない問題があり、音声認識や要約筆記者により文字情報へと視覚化して Zoom の共有画面に取り込む必要があります。そこで、情文センターとも相談して、要約筆記者の表示用パソコンに Zoom を搭載して貰い、そのパソコンから直接 Zoom に接続することで要約筆記者の文字情報を Zoom 参加者の共有画面に取り込むことが可能となりました。そのため今年から Zoom を利用して理事会や例会などを開催したいと考えています。しかし、新年に入り元日から東京都の新型コロナ感染者が 1,000 人を超える事態となり、また再び「緊急事態宣言」が発令されており、結局コロナ禍が丸一年の長期間となり、難聴者活動も新しい生活スタイルで続けなければならないと思われます。

(NPO 法人川崎市中途失聴・難聴者協会  
理事長 伊藤 實)

編 集 後 記
日本のジェンダー・ギャップ指数は「121 位/153 か国」との数字を見て驚いた。今回の女性蔑視騒動でネット検索した結果である。このことはジェンダーに限らず我々障害者にも当てはまるように感じてしまう。作品展や各団体活動などを通して多様性と共生をもう一度考えるきっかけとなるのではないだろうか。また、コロナ禍においては ICT 普及の遅れも露呈したことによりデジタル庁も設置される予定と言われている。時代の変化は激しいが無関心ではいけないのではないかと感じる。(編集委員 室住 二三夫)
発行人 神奈川県障害者定期刊行物協会 〒222-0035 横浜市港北区烏山町 1752 番地 障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 3F 横浜市車椅子の会内 (頒価 100 円)